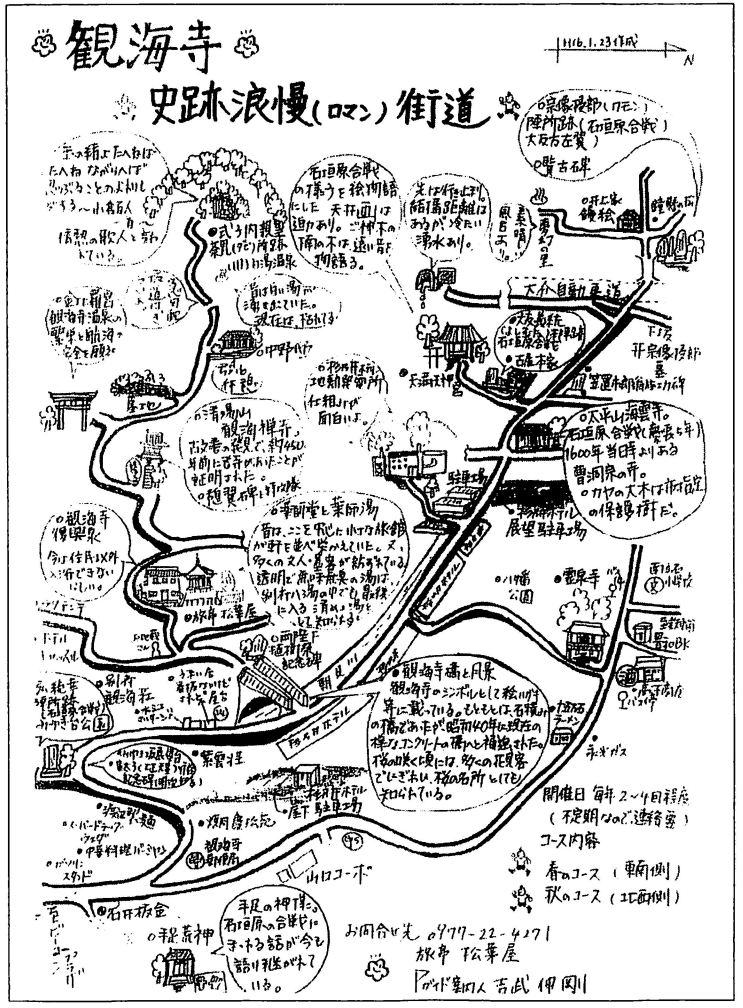

観海寺
史跡浪漫(ロマン)街道
H16.1.23作成
N
陣門跡(石垣原合戦)
大友方左翼)
賢古石碑
石垣原合戦の様子を絵物語にした天井画は迫力あり。ご神木の傍の木は遠い昔物語る。
笑は作るより結婚距離はみなが冷たい清水あり。
天介自動車道
中野川
天満社
観海寺温泉の歴史と脚湯の今を語る
清明山 観海禅寺
古武者の祟りと約450年前に観海寺が開かれたことが証明された。
地蔵尊
仏様
観海寺 温泉
観海寺 湯治場
駐車場
大平山 海雲寺
石垣原合戦(関ヶ原と同年)
1600年当時よりある
曹洞宗の寺。
カヤの大木は市の指定の保護樹だ。
ホテル 展望駐車場
八幡公園
電泉寺
面白い石 小指
観海寺 温泉
観海寺 ホテル
観海寺 ホテル
観海寺 ホテル

陽成天皇御親翰、大谷光瑞扁額、柳原白蓮扇面和歌、十市石谷双幅花鳥図、九条武子詠歌日誌、国宝元興寺古瓦（旧飛鳥寺）を見学の後、茶菓の接待を受け日出地区に向かった。

日出地区では先ず日出藩主木下公の菩提寺の松屋寺駐車場で下車、日出町案内ボランティアの二名の方に日出地区を案内してもらう紹介があった。国指定天然記念物の松屋寺大蘇鉄を見学の後、秘宝殿にて多くの宝物を見学し、伝雪舟の庭を巡った。やや坂を上り、日出藩主木下家の廟所を訪ね説明を受けながら巡回した。次いで帆足万里の墓にお参りした。日出城二の丸館駐車場で下車し城下公園にて、各自別府湾を通しての別府市街から大分市街を眺めながら弁当を食べた。城下公園には高浜虚子の句碑「海中に真清水わきて魚育つ」や空母海鷹（かいよう）の碑があった。ボランティアガイドの概略説明を受け、各見学地へと向かった。人柱祠を経て藩校致道館、復元建築中の隅櫓、二の丸館隣接地に復元された裏門櫓、大さざんかを通りながら的山荘に向かった。巨大な鞍馬石使用や庭木のすばらしさ、数寄屋風の建物と庭園を見学し、借景となる別府湾と高崎山の遠景を楽しんだ。その広大さから巨費を投じて建設したことが偲ばれた。

バスに再乗車し最後の見学地、深江地区に向かった。回天格納壕前にて深江地区の案内をして下さる魚住・松本氏と合流し、格納壕、魚雷調整プール、酸素圧縮ポンプ室等の説明を受けながら見学をし、回天神社に着いた。お参りを済ませ、回天特攻戦を始め陸海軍の特攻戦の説明・解説を聞き、当時の軍人の心に思いを馳せた。次いで参勤交代の藩主の帆船の風待ち茶屋・襟江亭の見学をして帰路についた。予定時間が下がってしまったが、充実した探訪ができたと思っている。

本年も、当日配布の資料を掲載し、別添資料等も載せますので、事後学習の参考にして下さい。

「別府史談会　市外史跡探訪」資料

日　　時　平成二三年一〇月二三日

（九時三〇分　別府駅受付）

探訪コース　覺正寺（豊岡）→松屋寺→木下家歴代墓所

→帆足萬里墓所→致道館→暘谷城趾《昼食》

→的山荘→回天神社→襟江亭

「資料」

（一）覺正寺（浄土真宗本願寺派）

文永八年（一二七一）大友氏の家臣荻野氏が、比叡山より妙徳大和尚を迎え開基。後、永禄五年（一五六二）、浄土真宗行覺（宗巌）和尚が住職となり、浄土真宗に転じた。当時教勢は盛んで、豊の国内外を含め門徒数千戸といわれた。江戸時代に入ると、寺の所在地、頭成村が豊後森藩（久留島侯）の飛地となり、頭成港が参勤交代に利用されるようになると、覺正寺が本陣の役目も果たすようになった。

現在、庫裏に続く西側の奥に藩主の寝所と宿直侍の控えの間が残されている。

現本堂などは、文化十年（一八一三）再建されたものである。寺には鎌倉時代末期の作といわれる「御本尊阿彌陀如来」がある。なお、別府の鶴見村は森藩領で、照湯山や明礬山の明礬採取に大きな役割を果たした。

（二）松屋寺（曹洞宗）及び木下家墓所

『豊後国志』（一八〇三、唐橋世済・田能村竹田）によれば、初め水月堂とよばれる仏堂に仁聞菩薩作といわれる仏像三躯があった。後に赤山西明寺とよばれ天台宗に属していた。慶長六年（一六〇一）日出藩初代木下延俊の入封の際、これを仮の菩提寺としたが後に改めて、康徳山松屋寺と命名した。この山号と寺名は延俊の祖母朝日の方の法名「康徳寺殿松屋妙貞大姉」にちなんだものである。この寺の墓所には歴代藩主や親族、家臣の墓が五十二基あり、日出町の有形文化財に指定されている。

なお、寺内には雪舟の作といわれる裏庭や、「涅槃図」などの寺宝が保存されている秘宝殿がある。

（三）大蘇鉄の由来

この蘇鉄は、明暦三年（一六五七）二代藩主俊治が府内城番交代の際、持ち帰り植えたという。樹齢約三百五十年、日本一の蘇鉄という。

（四）帆足萬里（一七七八～一八五二）の墓

萬里は安永七年（一七七八）、日出藩家老職帆足家の三男として誕生。少年時代は豊岡小浦の脇蘭室の私塾菊園で学ん

だ。寛政十年（一七九八）萬里二十歳、大阪に出て中井竹山（朱子学派・蘭室の旧師）や京都の皆川淇園（折衷学派）に学び、更に福岡の亀井南冥や日田の広瀬淡窓らにも学んだ。享和三年（一八〇三）、萬里は日出城下に家塾「稽古堂」を開き、翌年には藩学教授にも登用された。萬里は、自然科学、医学にも通じ著書も残した。代表作は『窮理通』（物理学書）であるが、文化七年（一八一〇）一旦完成するが誤りを発見、一からオランダ語を学んで原書にあたり、天保七年（一八三六）に至り完成した。この間、天保三年（一八三二）から六年間、家老職に就き藩財政再建に努め、引退後は南端目刈に家塾「西崦精舎」を開き弟子と移り住んだ。

著書に『窮理通』・『東潛夫論』（警世の書）・『傷寒論新注』（医学書）がある。

（五）致道館（県指定史跡）

県内で現存する唯一の藩校施設。安政五年（一八五八）十五代藩主木下俊程の時、二の丸に建てられた。学校創設の趣旨は、八歳以上の子弟に、読書・習礼の教育、のち漢学を課し、又武芸を習練させることにあったが、ことに学神として孔子を仰ぐことを明示した。教科目は後に整備され、和学・洋学・詩文・算学・天文・地理・歴史など加えられたが、日出藩の特色である医学も重視され、館内に医学局が設けられ、漢洋両医学を研修させている。生徒は、通学生約二〇〇名、寄宿生五〇名（藩費生三〇名・自費生二〇名）で、学力の程度により、受業生、素読生、四書生、五経生、明経生（四書生以下は儒教の原典学習）の五等級に区分された。明治四年（一八七一）の廃藩により閉校。昭和二六年（一九五一）現在の地に修復移築された。

（六）日出城「暘谷城」（別称）

関ヶ原合戦の翌慶長六年（一六〇一）、豊臣秀吉の正室ねねの兄木下家定（前姫路城主）の第三子延俊が、速見郡日出三万石に封ぜられて日出藩の歴史が始まる。家定はもとは杉原姓であったが、妹ねねが秀吉の正室になったために木下姓を許されたのである。延俊新封の日出は無城の地であったために、延俊は早速築城に取りかかり、翌七年（一六〇二）八月に新城完成を見た。縄張（設計）は中津城主であった細川忠興（延俊の正室加賀の兄）の手になり、野面積（のづらづみ）で家臣の穴生理右衛門の手になるといわれている。本丸は南側海に面した高い位置にあり、三層の天守閣を構えた。城辺には、望海櫓、月見櫓、隅櫓、裏門櫓など二層櫓五基、平櫓一基を配した。このうち隅櫓は本丸の東北鬼門にあたるとこ

ろから、鬼門櫓ともいわれ鬼門避けとして櫓の東北隅の角を取り、その下の石垣、水堀りも隅を内側に入り込ませた。現在、この隅櫓は萬里図書館前に復元中。また、裏鬼門にあたる西南の隅の石垣から昭和三五年（一九六〇）老武士らしき人骨が発見され、人柱であると考えられ人柱祠が祭られている。

その他、現日出小学校（裏門櫓の跡地）に三代藩主俊長が元禄八年（一六九五）に鋳造させた釣鐘がある。一日に十二回この鐘をついて時刻を知らせたという。

なお、「暘谷城」名称は、三代藩主俊長が中国の書、淮南子（えなんじ）の「日は暘谷より出でて咸池に浴す」より引用したといわれている。

※『淮南子』紀元前二世紀に成立した書

咸池＝太陽が水浴するという天上の地

暘谷＝太陽の出てくる所

（七）的山荘（日出町指定有形文化財）

馬上金山（杵築市山香町）の鉱主であった成清博愛（なりきよひろえ）が、大正四年（一九一五）に三の丸の一部を譲り受け、総工費二五万円（現在の七～八億円）で建てた別荘。豪華な日本家屋である。別府湾（池）や高崎山（築山）を借景とした見事な庭園がある。三代の信輔の時、「城下かれい」料理割烹店として全国に名が知られ、皇室をはじめ知名士が多々訪れるようになった。成清博愛は元治元年（一八六四）福岡県山門郡瀬高町（現福岡県みやま市）の生まれ。明治時代の末、閉山同然であった馬上金山の採掘権を買い取り、明治四三年（一九一〇）開鉱した。幸い金鉱は高品位で大正三年（一九一四）には日本一の生産高を記録、最盛期には一か月の収益が四二万円（現在の約十二億円）を超えていたという。博愛は余財を大分県の金融・交通・慈善事業にも投じ日出港の整備にも尽力した。

的山荘には、知名士の納めた額や、美術品が保存されているが、博愛と親交のあった和田三造の筆になる、馬上金山を描いた四曲一双の刺繍屏風の下絵や、玄関そばの獅子の絵などはその代表作である。博愛は大正四年（一九一五）衆議院議員に当選するも、翌年、病を得て的山荘で五十二歳の生涯を閉じた。なお、「的山荘」の名称は博愛の号「的山」に由来する。

（八）回天神社

日出町大神漁港に面した小高い山に回天神社がある。

その由来は、昭和二十年（一九四五）四月、戦局の窮状を救うべく組織された特攻隊人間魚雷回天大神突撃隊の基地

（兵二〇〇〇名）が深江に設けられ、守護神が勧請されて基地内に祀られたことにある。祭神は天照大神などである。戦後、旧隊員らの要望もあって、社は住吉神社の境内に遷され、平成十三年（二〇〇一）現社殿が新築された。

人間魚雷「回天」は、優れた性能を持った九三式魚雷を改造し、内部に兵員一人が乗りこれを操縦して、敵艦に体当たり爆破するものであった。性能は、全長十四・七五メートル、直径一メートル、排水量八トン、速力三〇ノットであった。山口県徳山湾内の大津島をはじめ各地に基地が設けられたが、間もなく終戦を迎えその任を終えた。回天乗組員戦死一〇六名、その他、警護潜水艦乗組員、基地関係者を含め一〇七三名が神社に祀られている。なお、遺跡として水雷壕、回天格納庫その他があり、また、御神器として縦舵機、発停装置、燃焼器推進軸受など回天部品が祀られ、社殿横には大神回天会より奉納された、回天模型、九三式魚雷機関その他がある。

（九）襟江亭「日本で現存する唯一の風待ち茶屋」

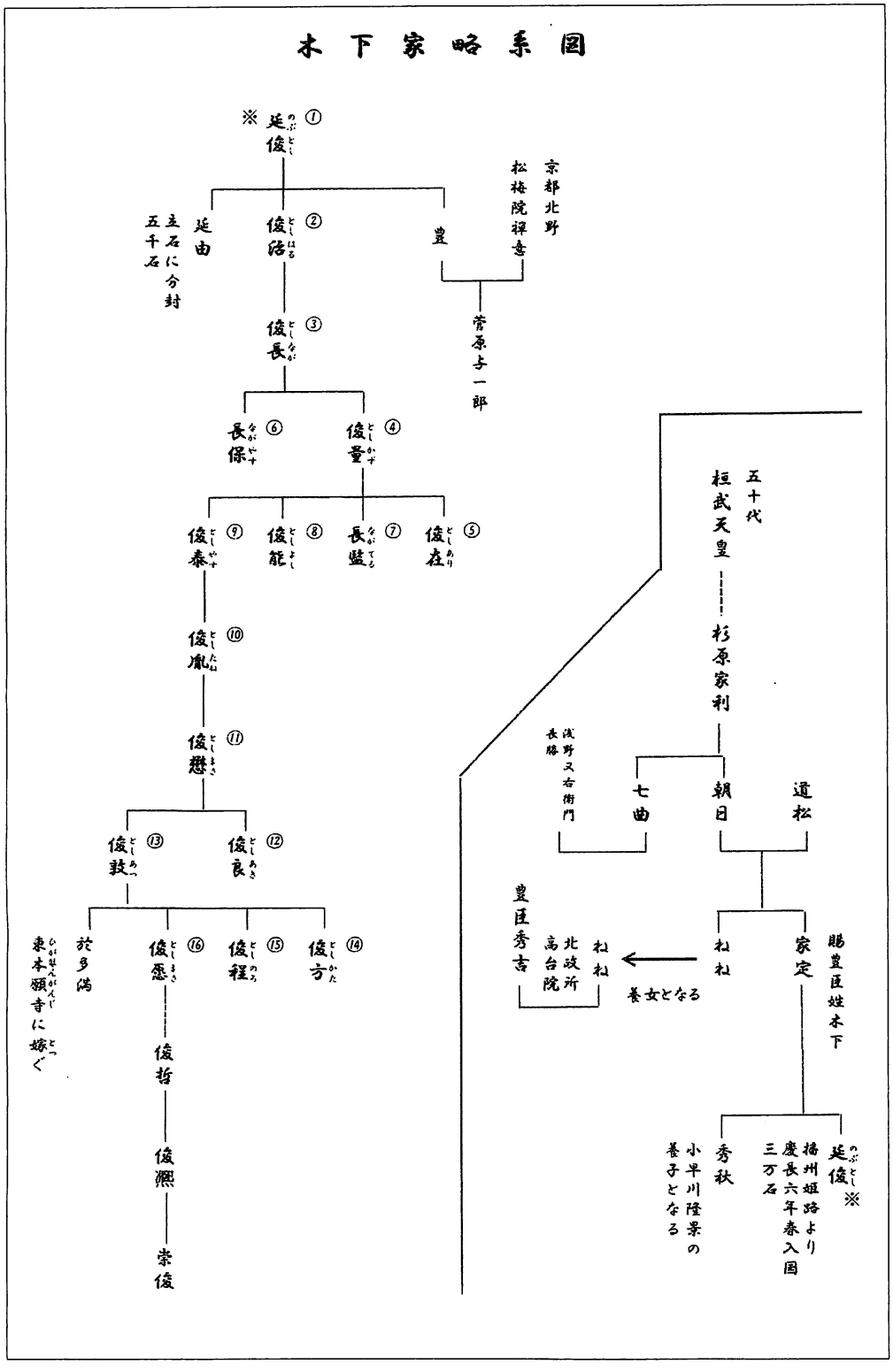
三代日出藩主俊長が、参勤交代の帆船の風待ちや潮待ちのために建てた、木造平屋の宿泊施設。当時、敷地のすぐ前が船着き場で「襟江亭」の正面門から船の乗降が出来た。また、門の石段の幅は駕籠横付けのため駕籠の幅に合わせている。

「襟江」とは、深江港の別名で、緩やかに波打ちながら次第に狭まる形状の港が、衣服の「襟」に似ていることから名付けられたという。

《参考及び引用文献》

『日出町誌』（本編）『玖珠町史』（上巻）『日出町の歴史Ⅰ』（久米忠臣氏）
『日出町探訪』（日出町観光協会）『人間魚雷回天　大神基地』（日出町）
『大分県歴史人物事典』（大分合同新聞社）
『宇佐・国東・速見の歴史』（郷土出版社）
『人間魚雷回天』（山近義幸氏・全国回天会他監修）
『別府の古い道　歴史散歩』（別府史談会）
「城下町ひじ歴史散策」（萬里図書館長　工藤智弘氏　講演資料）
その他「松屋寺」、「致道館」、「的山荘」、「郷土日出町の碩学・帆足萬里」、「日出城の歴史」、「深江地区を歩く」などの案内書

木下家略系図


※ 延俊 ①
京都北野
松梅院禅意
延由
五千石に分封
俊治 ②
豊
菅原与一郎
俊長 ③
長保 ⑥
俊量 ④
俊泰 ⑨
俊能 ⑧
長盛 ⑦
俊在 ⑤
俊胤 ⑩
俊懋 ⑪
俊敦 ⑬
俊良 ⑫
於多満
東本願寺に嫁ぐ
俊憲 ⑯
俊程 ⑮
俊方 ⑭
俊哲
俊熙
崇俊
五十代
桓武天皇
杉原家利
浅野又右衛門
長勝
七曲
朝日
道松
ねね
家定
賜豊臣姓木下
ねね
北政所
高台院
豊臣秀吉
養女となる
秀秋
小早川隆景の
養子となる
延俊 ※
播州姫路より
慶長六年春入国
三万石

（致道館の生徒の等級）

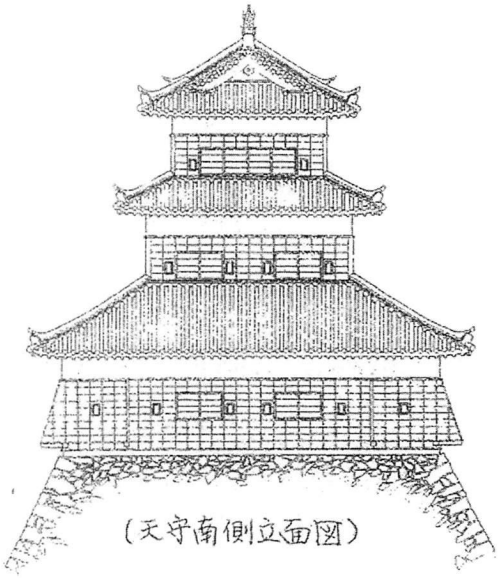
受業生　始メテ学校ニ入学シ、四書等ノ句読ヲ受ケル者

素読生　四書ノ句読ヲ終リ、素求小学十八史略等ヲ独見スル者

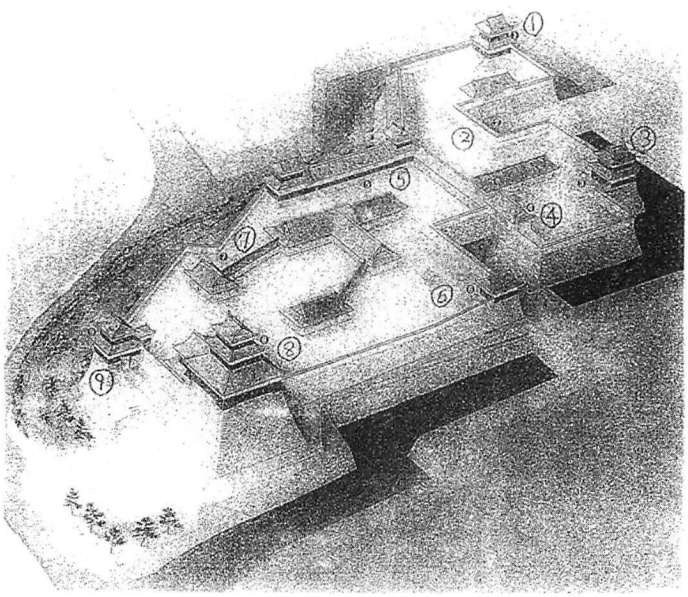
四書生　左國史漢等ノ書ヲ解シ、能ク四書ノ講義ヲナシウル者

五経生　資性通鑑、通鑑記事本末等ノ無点本ヲ通読シ、五経ニオイテ通ゼザルモノナキ者

明経生　経籍ニオイテ通ゼザルナク、広ク諸家ノ説ヲ折衷シ、マタ諸子百家ノ書ニワタル者

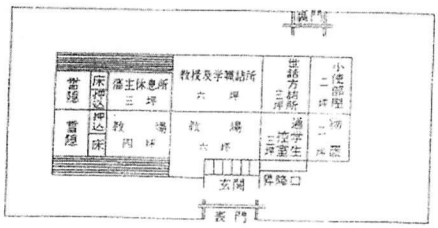


（天守南側立面図）

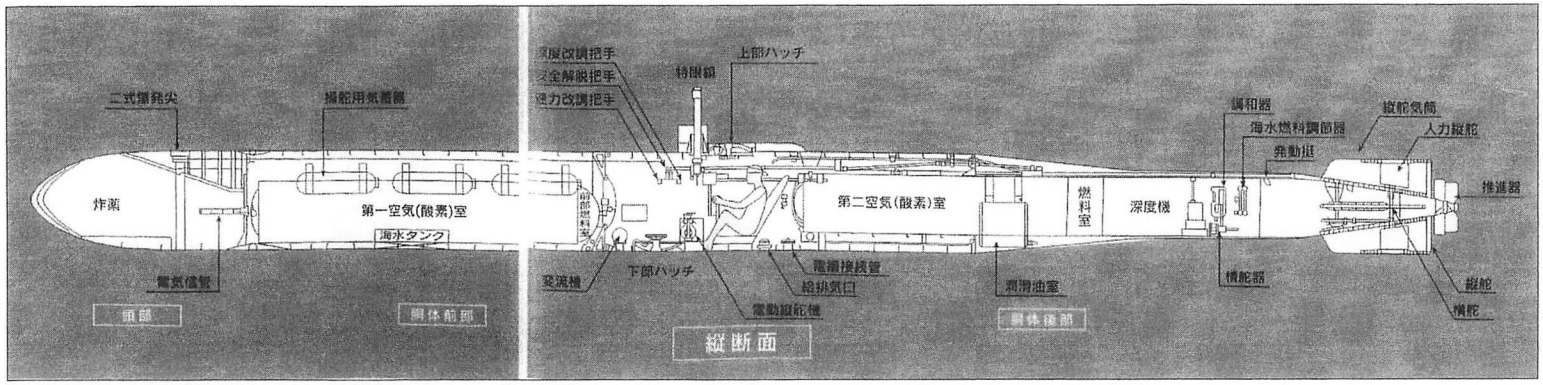


日出藩復元図
❶月見櫓
❷大手門
❸鬼門櫓
❹裏門
❺渡り廊下
❻裏門櫓
❼裏鬼門
❽天守閣
❾望海櫓（登城橋）

①月見櫓　③鬼門櫓　⑤渡り廊下　⑦裏鬼門　⑨望海櫓
②大手門　④裏門　⑥裏門櫓　⑧天守閣



致道館平面図（「藩政時代の教育」より）



回天の性能

- ■全　　長：14.75m
- ■直　　径：1.00m
- ■全 重 量：8,300kg
- ■速　　力：30ノット（航続距離23km）
  10ノット（航続距離78km）
- ■頭部炸薬：1,550kg
- ■燃　　料：酸素、白灯油
- ■搭 乗 員：1名

1 船体構造

船体は頭部、胴体、九三式魚雷三型で構成。胴体前部には九三式魚雷の酸素気蓄器、燃料室、操舵用気蓄器、下部に海水タンクなどが装備されていた。胴体後部の前は操縦室で操縦席を中心に、電動縦舵機など様々な機器類が配備されていた。回天の安全潜航深度は80mで、搭載潜水艦の100mとずれがあったが、改良するには戦機に間に合わないため、そのまま作戦は進められた。

2 頭部

頭部には戦備する際に装着する実用頭部と、訓練用の駆水（くすい）頭部の2種類があった。実用頭部には1,550kgの炸薬（さくやく）が充填され、如何なる艦船も撃沈できるといわれ、突入の際に搭乗員がスイッチを握り、命中時の衝撃により体が前方に傾くと自然にスイッチが入るようになっていた。
駆水頭部は深度駆水室と応急駆水室からなり、海水を入れて訓練をしていた。

3 操縦

回天の操縦は基本的には自動操舵である。ジャイロコンパスを内蔵した電動縦舵機により制御され、搭乗員が設定すれば電動により所定針路に航行することができた。操縦席の上と下にハッチがあり、下部ハッチは潜水艦より発進する際に使用し、上部ハッチは訓練時や陸上基地より発進する時に使用していた。外の観測や目標の把握には操縦席上部の特眼鏡を使っていた。

4 機関

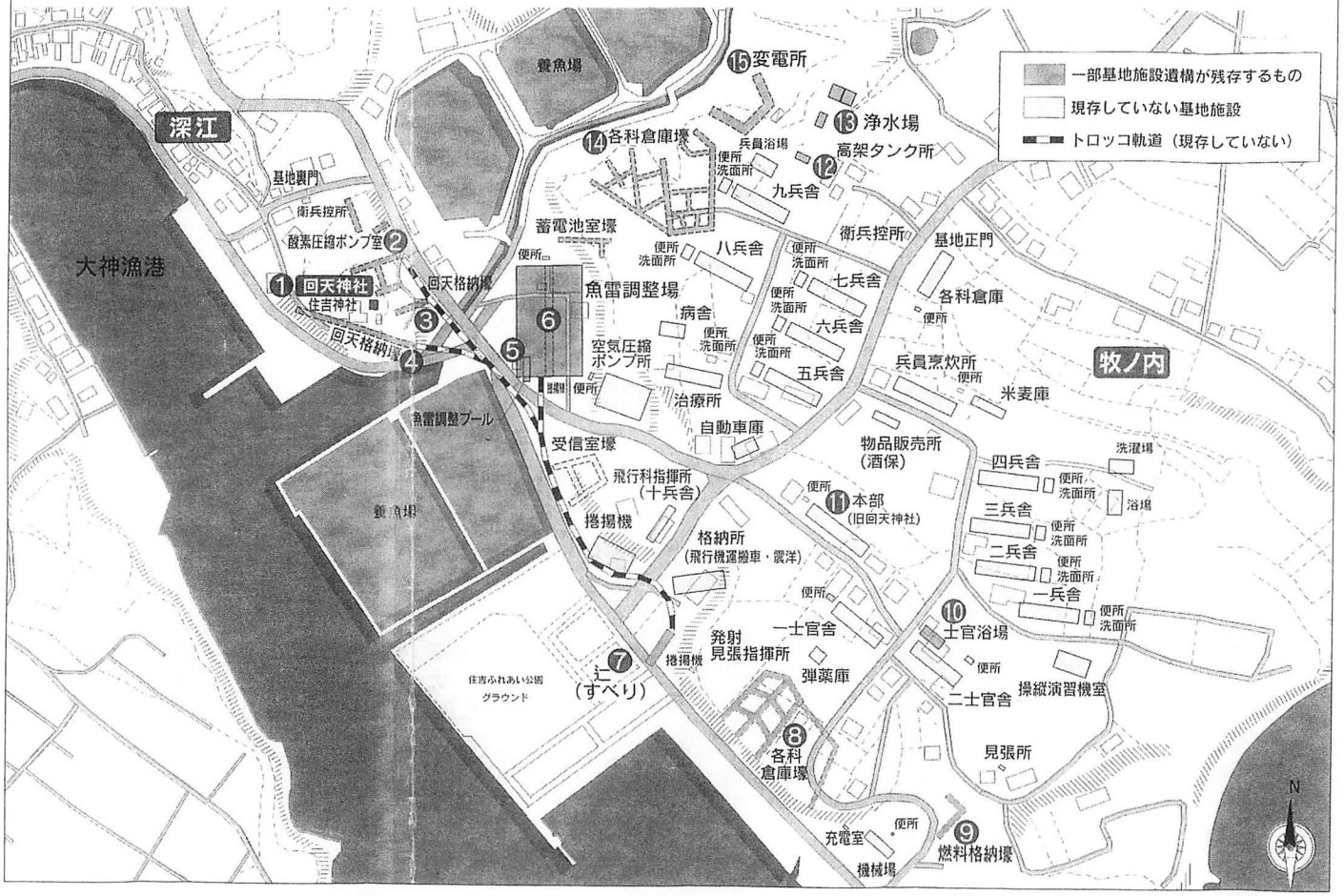
推進機関は九三式魚雷三型を使用していた。この魚雷は純酸素と白灯油を燃料とし、燃焼室に噴射、点火し海水を霧状に噴射することにより高圧高温蒸気を発生した。この蒸気に二気筒のピストンを作動させ、550馬力の出力が得られた。推進力となった蒸気は海中に排出され、その際に海水に溶け込んでしまい、気泡が発生しないため回天の航跡は敵より発見されにくかった。

5 出撃方法

回天は伊号潜水艦に4～6基甲板に搭載され、海中で固縛バンドから切り離されて敵艦に向け出撃した。潜水艦々長の発進命令の後、搭乗員は渾身の力を込め発動桿（ほつどうかん）を押し回天を発進した。

伊号型潜水艦に搭載された回天

「人間魚雷回天
大神基地」
（日出町）より

大神基地の全容

「人間魚雷回天大神基地」（日出町）より